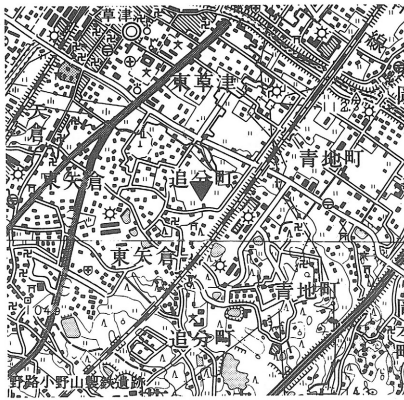


滋賀・大将軍遺跡
だいしょうぐん

- 1 所在地 滋賀県草津市追分町
- 2 調査期間 第一次調査 一九九三年(平5)六月～一九九四年三月
- 3 発掘機関 草津市教育委員会
- 4 調査担当者 谷口智樹
- 5 遺跡の種類 官衙関連遺跡もしくは集落跡・古墳群
- 6 遺跡の年代 縄文時代後期～近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(京都東北部・京都東南部)

大将軍遺跡は、草津市東部の標高一〇〇から一〇六m前後の、低丘陵部に位置する遺跡である。九三年から九六年の区画整理事業に伴う発掘調査で、一三〇棟以上の奈良時代中期(平城Ⅲ)～平安時代前半(二〇世紀中葉)を中心とした掘立柱建物群が検出された。その後の民間開発に伴う調査でも、

新たに四〇棟以上の建物群が検出されている（遺構図参照）。建物の軸方位は、真北から三〜九度前後東に振るものが主流を占め、当地域に遺存する「正方位地割」に概ね合致するものといえる。調査の結果からは、「正方位地割」に係る明確な坪界溝等は検出されていないが、建物群を取り囲む区画溝が検出され、溝心間で一〇・六m前後となり、ほぼ一町域単位で巡っていたものと解される。また、調査区M一〜二区及びL一〜三区では、区画溝間に一〇〜一二m前後の空地が存在することから、通路として使用されていた可能性が高く、通路の心間を中心にした区画を考えた場合、約一一・六m前後で東西三町、南北二町の区画割が想定されるようである。

次に、奈良時代から平安時代の遺構群の検出状況を見ると、遺跡の中央部にあたるM一〜三区では、倉庫と考えられる建物群が集中し、L字形あるいはコの字形の計画的な配置形態をとるものと考えられる。また、当地区では明確な井戸は検出されていないが、M一〜三区西側のO一〜S二区及び東側のF〜I区では、建物群とともに一区画当り二基から四基の井戸が検出されており、M一〜三区とは異なった様相を呈している（草津市教育委員会『草津市文化財年報』平成五年度〜十年度 一九九五年〜二〇〇〇年、谷口智樹「草津市追分・矢倉周辺における奈良・平安時代の遺跡動向について」〔奈良里制古代都市研究〕一四 一九九八年）。

今回報告する木簡は、遺跡東部G区井戸SE三最下層から出土し

たもので、「稲万呂」「美」の墨書を有する奈良時代中期（平城Ⅲ〜Ⅳ）の須恵器杯などが共伴している。SE三は直径二・三m深さ二・八mで、中央に一辺〇・九mの方形の井戸枠が遺存していた。井戸枠は地表下一・五m前後までしか構築されていないことから、二期の使用が確認されている。

区画整理事業に伴う調査以外の周辺での調査を含め、現在までに木簡は一点出土したのみだが、その他、墨書土器は四〇点ほど出土している。判明している文字には、「稲万呂」三点、「高子」二点、

「南」二点、「美」「五」「甲」^{〔久カ〕}が各一点、「郷長」五点、「高野郷

長」一点、「高野郷」一点、「野郷」一点、「高野」三点、「高郷」

二点、「高長」二点、「長福」三点、「栗太」一点、「税」二点などがある。墨書土器は一部古墳の周溝内から出土したもの（「南」一点）

があるが、他はいずれも井戸及び溝からの出土である。掲載した写真

は、二〇〇〇年二月から三月にかけて実施された、第二三次調査

出土の墨書土器である。O三区の西側にあたり、八世紀後半から九

世紀初頭にかけての溝から出土したものである。

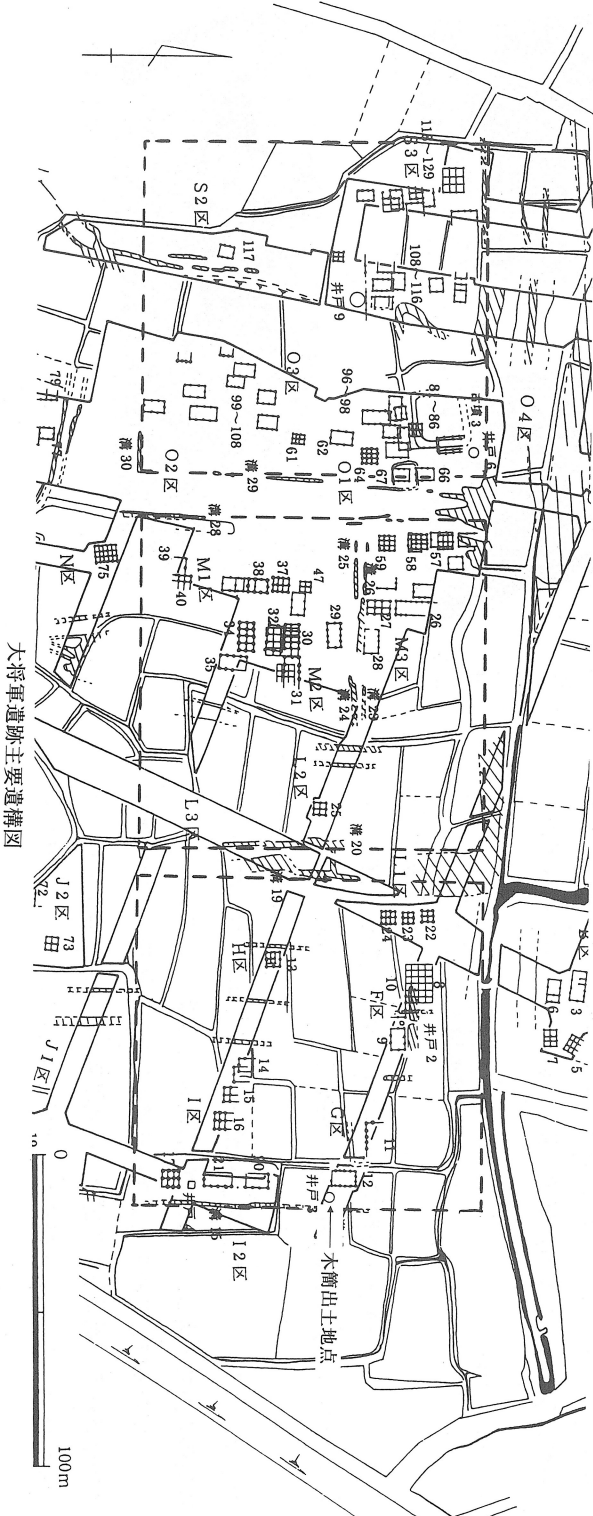
これらの墨書のうち特に注目されるのは、「高野郷長」「高野郷」

「郷長」の墨書である。律令期における栗太郡内の郷名は、「和名

類聚抄」などに物部・治田・梨原・木川・勢多の五郷が見えるのみ

で、高野郷については、栗東町六地藏所在の福正寺絵像裏書に「癸

西（一五二三）九月三日、江州栗太郡高野郷六地藏福□寺物也」と



大将軍遺跡主要遺構図

